複言語・複文化主義に根差した日本語短期プログラムの取り組み

山森　理恵（明治大学）

要旨

本研究は，複言語・複文化主義に根差し，日本語で自らが伝えたいことを伝える力の向上，異文化の尊重，他者との共生を目指した本学の短期プログラムにおける取り組み（2023 年冬期・夏期）を紹介し，参加者にどのような影響を与えたかアンケートの分析から明らかにすることを目的とする。協力の得られた参加者 1 名のフォローアップインタビューも合わせて分析対象とする。

分析から，自らが伝えたいことを伝え，異なる文化や考えに触れ，協働して一つの目標達成を目指す取り組みによって，言語力の向上だけでなく，異文化の尊重，異なる他者との共生にもつながることが期待できると言える。

【キーワード】日本語短期プログラム，複言語主義，複文化主義，異文化の尊重，共生

Keywords: Japanese language short-term programme, plurilingualism, pluriculturalism, respect for different cultures, coexistence with others

1　はじめに

筆者の所属大学では，海外での認知度向上や留学生の獲得，国際交流の場の創出を目的に 2011 年より短期プログラムを開催してきた。2019 年までは外部委託で実施，コロナ禍で休止後，2021 年から 2022 年夏まで学内でオンラインにより開催，23 年冬から新たな企画で学内での対面開催を目指した。

筆者は以前から，日本語力を高めるだけでなく，差異と多様性を受け入れ，「共に生きる」力を育む教育実践に取り組んできた（山森 2019, 2021）が，新たな形で開催するにあたり，単なる言語力向上や文化体験にとどまらない，

日本語で自らが伝えたいことを伝えること，異文化の尊重，他者との共生を目指す，複言語・複文化主義に根差したプログラムとすることを目指した。

複言語・複文化主義では，「一人ひとりが「目的があるコミュニケーション（しなくてはいけないこと/したいこと）」を行うために，自分の中にあるすべての言語能力を使いこなす力（資質，技能，能力）を育てることに重点が置かれ」，「言語は文化の中の一つの重要な要素であり，いろいろな文化の人たちと共存していくための不可欠な手段」とされている（奥村他 2016）。このような考え方をもとに，日本語で自らが伝えたいことを伝えること，異文化の尊重，共生につながるプログラムを目指した。

2　本研究における実践

本実践は 2 週間の日本語短期プログラムである。プログラムはヨーロッパ言語共通参照枠 CEFR で A2 レベルのクラス，B1 レベルのクラスの 2 つの日本語レベルのクラスから成る。1 コマ 100 分の授業を 24 コマ，計 40 時間実施するもので，その内訳は日本語授業が 13 コマ，プロジェクトワークが 8 コマ，日本文化講義 3 コマである。日本文化講義は伝統文化として坐禅を，また現代文化としてアニメを，講義と体験を交え，学べるようにした。その他に期間中の 1 日を交流バスツアーに充て，さらに歓迎会やクラス交流会，先輩交流会，修了式，オフィスアワーなども実施した。単位認定はなく，成績証を発行するのみとなっている。本学の学部生・院生が各クラスの専属サポーターとしてそれぞれのクラスの授業などに参加した。

世界各地の大学から 2023 年冬期は A2 クラス 13 名，B1 クラス 16 名の計 29 名が，夏期は A2 クラス 14 名，B1 クラス 14 名の計 28 名が参加した。

プログラムの特徴としては次の 3 つの点が挙げられる。一つは，多様な人との交流である。世界各国の本学協定校，非協定校の学生が参加し（2023 年冬期は 11 の，夏期は 15 の国・地域から参加），また，本学の学部生・院生 12 名が毎日の日本語授業 1 時間，プロジェクトワークの全授業，その他の催しに学生サポーターとして参加する。それに加え，本学に在学中の先輩留学生

との交流会も開催されるため，さまざまな立場，異なる文化・価値観の人との対話の機会が確保される。

二つ目の特徴は，話す活動の時間の十分な確保である。日本語授業では毎日 1 時間を話す活動の時間に充て留学生・学生サポーターがグループでさまざまなテーマについて話す時間とした。また，プロジェクトワークの時間はグループで相談をしなければ課題が達成できないため，考えを伝える機会となると言える。

三つ目の特徴は，協働の機会の確保である。プロジェクトワークの授業ではグループで対象を定め，対象に役立つテーマの短編動画を作成する。つまり，限られた時間で期限までに，グループメンバー全員の異なる意見を全員が受け止め，調整し，協働して一つの作品を作り上げることが求められる。

これらの特徴を備えたプログラムを実施し，参加者がどのような影響を受けたか，アンケートとインタビューから探った。

表 1：プロジェクトワークの実施方法

実施のしかた	・ グループ編成は，各グループが多様なメンバーになるように教師が決定（助け合えるように動画編集のスキルも考慮して編成） ・ サポーターもグループの一員として参加し，グループのメンバー全員が同程度の負担を担うフラットな関係 ・ 編集技術ではなく，内容と日本語ナレーションに重点を置く ・ グループメンバーが「今，ここで」できる内容にすることを推奨
手順	・ どんな人に見てほしいのかを考えて，テーマを決める ・ テーマに沿って，アウトラインを作成し，取材や資料収集を実施 ・ 写真と日本語ナレーションを組み合わせて編集

3　分析方法

終了後行った記述式アンケートの回答とフォローアップインタビューを分析した。

アンケートについては，2023 年冬期と夏期の 2 回に参加した 57 名から集まった回答から，研究への協力の同意が得られなかった参加者の回答を除外したうえで，残る 49 名分（欧州の大学・大学院に在籍する参加者 10 名を含む）の回答を分析対象とした。49 名の国籍は表 2 の通りである。

質問①，質問②の 2 つの質問に対する記述式の回答を，内容のまとまりで切片化し，コーディングを行った。

表 2：分析対象の参加者の国籍

	クラス	国籍
2023 冬	A2	スイス 2，オーストラリア・韓国・スイス/イタリア・中国・デンマーク・ブラジル・米国・ルーマニア各 1
	B1	中国 6，韓国 3，米国/日本 2，インド・台湾・ハンガリー・フランス各 1
2023 夏	A2	中国 4，インドネシア・オーストラリア・カナダ・韓国・コロンビア・フィリピン・香港各 1
	B1	中国・台湾・香港各 4，イタリア 1

質問①：このプログラムに参加して，申し込み時に期待したことが得られましたか。また，予想していなかったけれど，得られたことはありますか。

質問②：このプログラムに参加し，他の留学生や学生サポーターと交流した結果，何か新しいことに気づいたり，考え方が変わったりしましたか。どのような変化か，くわしく教えてください。

フォローアップインタビューについては，2023 年夏期の参加者で協力の得られた 1 名（B1 クラス SS17，英国の大学所属，香港出身）に対し，半構造化インタビューを行い，その内容を文字化した。

4　結果と考察

4.1　アンケート結果

切片化した回答から得られた主なコードは「日本語力・日本語発話」「日本語で話す勇気」「学生サポーター」「異なる他者との交流・協働」「文化」「決意」であった（表 3，表 4）[1]。

表 3：コーディングの主な結果

		クラス	日本語力・日本語発話	日本語で話す勇気	学生サポーター	異なる他者との交流・協働	文化	決意
質問①	2023 冬	A2	8	2	0	2	0	0
		B1	9	0	1	6	3	0
	2023 夏	A2	9	1	3	8	1	1
		B1	11	0	1	9	2	1
		計	37	3	5	25	6	2
質問②	2023 冬	A2	2	1	2	2	0	0
		B1	3	2	1	6	1	0
	2023 夏	A2	3	4	1	1	1	1
		B1	2	2	0	5	1	2
		計	10	9	4	14	3	3

表 4：各コーディングの記述例

コーディング	記述例［原文ママ］　［WS=冬期参加者，SS=夏期参加者］
日本語力・日本語発話	プログラムを参加した後は n 日本語前より説明できる。［質問②夏 B1 クラス SS26］
日本語で話す勇気	Yes I was able to improve my japanese skills and confidence in speaking which i had hoped to improve.［質問①冬 A2 クラス WS18］
学生サポーター	Besides, communications with supporters made me learned more about Japan.［質問②冬 A2 クラス WS23］
異なる他者との交流・協働	I get to interact with people with different backgrounds［質問②夏 B1 クラス SS3］ When making videos, I have found that people from different countries have different views. Some may be hard to accept, but overall , it's a good experience.［質問②夏 B1 クラス SS5］
文化	本に対して　文化の差異を知って これが一番面白いこと［質問②夏 A2 クラス SS10］
決意	I decided that I will go back to Japan and stay living and working there.［質問②夏 A2 クラス SS21］

最も多かったのは「日本語力・日本語発話」に関する記述であった。日本語で自ら伝えたいことを伝える力の向上を実感したことがうかがえる。次に多かったのは「異なる他者との交流・協働」に関する記述で，プログラムを通して異文化や他者の異なる考えに触れ，それを尊重し，受け入れる機会になったことがうかがわれ，共生につながる姿勢を育む機会となったと考えられる。

4.2　インタビュー結果

インタビューからは日本語で話す機会を貴重な機会と捉えていたこと（表 5 ①，②），いろいろな文化，意見を知る機会となったことを肯定的に捉えていたこと（③，④）がわかった。意見が違っても仲良くできることに対する喜び（⑤）も語られていた。日本語で目的のあるコミュニケーションを行い，他者の異なる文化や意見を尊重する姿勢，共生につながる姿勢が確認できた。

5　まとめと今後の課題

2 週間という短期間のプログラムにおいても，多様な人と交流する機会，話す活動の機会，協働の機会を可能な限り確保することで，自ら伝えたいことを日本語で伝える力，異文化を尊重し，異なる他者と共生する力を育む機会

となることがわかった。

今後，異文化の尊重，異なる他者との共生によりつなげていくには，どのように取り組みを工夫するとよいか，さらに検討していくことが求められる。

表 5：フォローアップインタビュー抜粋（原文ママ，強調は筆者による）

①	人と話すチャンスが必要なので，**会話できるのは重要**
②	文法の授業対策と違って，めずらしいのチャンス（T：**グループで話したり）そうそうそういうの大事**。
③	クラスメートもいろんな国から来たから，いろんな文化とかも知ってて，**もっとほかの学生さんの文化も知る機会もあって，いろんな意見とか，いろんな交流もできて，ほんとに楽しかった**。
④	**違う文化，違うバックグラウンド持ってる人も，そういう立場から見る意見も勉強できて，よかったと思います**。
⑤	まあ，例えば，中国からの留学生もあってまあ，そういう違いもある，理解できる，なくない，そういう状態，けど，みんな，ほんと仲良くなって，なんか，**そういう意見があっても，なんか，仲良くできるのはうれしいです**。

＜注＞

1. 6 つのコード以外に具体的に何を学んだか指摘のない「学び（いろいろなことを学べました。この短期交換留学が本当に役に立ちました。［質問①冬 B1 クラス WS5］）」9,「プログラム評価（プログラムの設計は想像より良いと思います。［質問①夏 B1 クラス SS20］）」5,「経験」3,「自分への幻滅」3 などの記述もあった。

＜引用文献＞

奥村三菜子・櫻井直子・鈴木裕子（編）（2016）『日本語教師のための CEFR』くろしお出版.

山森理恵（2019）「「共に生きる」ための日本語教育の可能性－民主的シティズンシップ教育につながる実践例から－」『ときわの杜論叢』6, pp.52-64, 横浜国立大学国際戦略推進機構.

山森理恵（2021）「東日本大震災について考える日本語授業－民主的シティズンシップを育むことを目指して－」『ときわの杜論叢』8, pp.79-89, 横浜国立大学国際戦略推進機構.